

長澤美津編

女人和歌大系

第五卷

風間書房

女人和歌大系 第五卷

定価 11,000円

編者 長澤美津

発行者 風間歳次郎

印刷者 中内弘光

発行所

株式会社 風間書房

〒101 東京都千代田区神田神保町一の三四

振替東京一―一八五三番

電話(二九二)五七二九番

昭和53年 6 月 5 日 印刷
昭和53年 6 月15日 発行

(有朋製本)

(分)3092—(製)780497—(出)0925

緒 言

本書は近代期の女性和歌作品を系統つけることを目的とした。

上代から一貫した和歌大系のなかに近代を加えようとすると、明治元年（一八六八）より昭和二十年（一九四五）までの約七十余年となる。期間としてはまことに短い区間である。

しかしこの期間に日本の和歌が展開し、新生面を拓いたことは画期的であって、近代期の特徴をたずね成立上からこれを更に前期と後期にわけてまとめることにした。今後相当の年限を経て概観するとき、前期・後期を合せて一区切として扱う可能性は多いと思うが、最も近い古典として判然と区別を立てておくことにした。さきに

第一卷 歌謡期・万葉期の女性歌

第二卷 勅撰集期女性の私家集・歌合歌

第三卷 私歌集期の江戸時代女性歌

第四卷 通巻しての研究篇 付補遺年表

の既刊に続く近代期の女性歌の在り方をみるに、前期は江戸期の延長線上に在り、外見上の変化はあっても内部的動きは非常に緩やかになされてゆくのであった。

明治は固定した封建生活から新しい社会生活に間断なく変化した時期であるが、前期はまだ家族制度及び生活感情は多分に封建遺制のもとにあった。したがって女性の生活の变革は目にはたぬ日常の習慣や、出来事のくり返しのな

かに、徐々に地下茎をのばすように蓄積された。やがてそこから無数の芽をふくように顕在化して来たのが後期である。

前期の代表者として樋口一葉をあげ、後期の代表者として与謝野晶子をあげることは、両期の柱としての適切な存在である。ともに明治になってから生をうけた。一葉は明治五年（一八七二）生れ、その五年後に、晶子は明治十一年（一八七八）に生れて、まさに生誕百年を迎えようとしている。

この時に集めた資料のうちから、前期を五巻とし、後期を六巻としてまとめておくことにした。江戸期に生をうけ、明治改元以後に活躍した人々及び、和歌を教養として身につけて歩み出した作者を前期五巻として収め、自分が作るということを意識して出発した人達のもを後期六巻に収めることにした。共に歌集を標準とし成るべく初版本を基準として操作した。

この大項は久松潜一先生御在世中に立てたものであつて、昭和五十一年三月二日御逝去に逢い、長年の御指導のあとを更に思いふかめるのである。今年の夏は異常なまでに雨の日が続き晴れやらぬ日々をこもりつつ仕上げに踏み切った。

本年九十二歳を迎えられた土岐善麿先生は、この間の作者達と親交をかさねられ、まのあたりに推移を体験されている。御高見を承り参考としたことをありがたく存じている。また近代・現代短歌を史的に研究されている木俣修氏の御意見も伺い御配慮に預った。尚資料として書陵部・明治神宮・東京大学図書館をはじめ、各地の図書館・前田育徳会が便宜をお与下さったことに御礼申上げる。

はじめより一貫して刊行に尽力された風間書房の積年の厚意を感謝する。

昭和五十二年秋日

長 沢 美 津

緒 言

凡 例

- 一、明治初年から同三十年迄の女性歌を歌集標準に大系つけた。
- 二、和歌を教養として出発した人の作品を対象とした。

（明治以前に生れ明治に活躍し、明治に生れ明治以後に作品がわたるものあり）

- 三、個人歌集を基準として、撰集にも及んだ。撰集の場合は女性歌の抄出となった。

- 四、遺歌集は典型（同流・地域・階層）となるものとどめた。没後の編集にても主要歌人のものは個人歌集として扱った。

- 五、特殊和歌集は年代に関係なく此の期に適當と認めるものを収めた。

- 六、大体は年代順であるが、成立の關係上前後するものもある。

- 七、女人和歌大系六巻中の第五巻（近代期前篇）であるが独立した一巻として編輯した。

- 八、索引は現代かなづかい五十音順とした。

総 括 図 表

時 代 別	記 紀 時 代			萬葉時代
期 別	歌 謡 期			萬 葉 期
天 皇 神 代	神武	推古		舒明 → 光仁
西 歴			六八〇	六八〇 → 七〇〇
政治及び社会制度		母 系 尊 重		律令制 (氏族) 家長制
女性の位置	女神 天照大神	軍事活動 ヒミコ	神功皇后	女帝
結婚形態	雑 婚			通婚 (一夫多妻)
代表歌人 (女性)	(沼河日売) (須勢理毘売)	輕太郎女 齊明天皇		額田王 坂上郎女 笠郎女
代表歌人 (男性)	(須佐男命)	神武天皇	倭建命	人憶赤家 磨良人持

時 代 別	平 安 時 代	鎌倉・吉野・室町時代	江 戸 時 代	近 代
期 別	勅 選 集 期	私 家 集 期		前 期 後 期
天 皇	桓武 ← 安徳	後鳥羽 ← 後奈良	正親町 ← 孝明	明治 ← 今上
西 歴	七六二 ← 一一八二	一一八三 ← 一五五七	一五五八 ← 一八六八	一八六九 ← 一九四五
政治及び社会制度	攝関政院政	封 建 制 (戦国時代)	制 (惣領・世襲)	天 皇 制
女性の位置	女房活躍 (外戚)	政治関与 (尼將軍)	勤王・ 遊女 佐幕・	廃 娼
結婚形態	通婚 (一夫多妻)	嫁 入 婚 (政略婚)		一夫一婦
代表歌人 (女性)	小町 伊勢 和泉式部 紫式部 清少納言	式子内親王 俊成卿女 永福門院	井上通女 荷田舊生子 本居藤子 鵜殿餘野子 町子	一 葉 子 晶 子
代表歌人 (男性)	業 平 貴 之 西俊 行成	定 家 伏見 院	眞 淵 景 樹	直 文 寛 子 規

時代	江戸時代				近代			
期	私家集期				前期	後期		
天皇	光格	仁光	孝明		明治	大正	今上	
西暦	一八〇四	一八一七	一八二八	一八四六	一八六八	一九一二	一九二六	一九四五
年号	文化	文政	天保	弘化	嘉永	安政	文久	明治
主要女歌人	(1850) 昭憲皇太后 (1914)							
	(1884) 貞明皇后 (1951)							
	(1806) 橘東世子 (1882)							
	(1823) 間宮八十子 (1891)							
	(1825) 税所敦子 (1909)							
	(1840) 跡見花蹊 (1926)							
	(1841) 西 升子 (1921)							
	(1844) 丸山宇米古 (1922)							
	(1844) 中島歌子 (1903)							
	(1845) 小池道子 (1929)							
	(1854) 下田歌子 (1936)							
	(1872) 樋口一葉 (1876)							
	(1884) ハチェラー八重子 (1960)							
	(1885) 柳原白蓮 (1967)							
	(1887) 前田漢子 (1918)							
	(1887) 九條武子 (1928)							
代表歌人	三條西季知	八田知紀	高崎正風	明治天皇	落合直文			

作者別
時代別

女人和歌大系 第五卷（近代期前編）

目次

緒言

凡例

図表

1. 総括図 図一

2. 近代期（前編）主要女歌人図表 図二

第一篇 明治前期の女性の歌集 一

第一章 概説 三

第二章 歌集 二

(A) 御集 二

昭憲皇太后「新輯昭憲皇太后御集」 二

貞明皇后「貞明皇后御歌謹解」 三

(付) 英照皇太后御歌……………三

(B) 私歌集……………五

税所敦子「御垣の下草」……………二四

丸山宇米古「雪間乃字米」……………二六

西升子「磯菜集」……………二六

間宮八十子「松のしづ枝」……………二六

中島歌子「萩のしづく」……………二六

小池道子「柳の露」……………二六

樋口一葉「樋口一葉歌集」……………二六

柳原白蓮「踏絵」「幻の華」「地平線」……………二六

九条武子「金鈴」……………二六

(C) 特殊歌集……………二六

森香子「森香子詠草」……………二六

フランセス・ホークス・カメロン……………二六

バーネット「雲のかよひ路」……………二六

パチエラー八重子「若きウタリに」……………二六

第二篇 明治前期の女性の遺歌集……………二七

第一章 概説……………二九

第二章 遺歌集……………三〇

(A) 個人歌集……………三〇

跡見花蹊「花のしづく」……………三〇

芝山益子「放懷樓歌集」	四二
遠山稲子「稲子遺稿」	四三
前田漢子「花筐」	四三
(付) 前田朗子「窓のともしび」抄	四四
江戸さい子「にひしほ」抄	四五
関井林子「落葉集」	四六
(B) 追悼歌集より女性歌抄出	四六
天璋院追慕の歌「松のした露」	四六
高崎胤子遺稿と追悼「わすれがたみ」	四七
高崎正風百日祭「なつのかは」 (夏川)	四七
豊原文秋五十年忌に「志のぶぐさ」 (兼題歌)	四七
落合直澄追悼歌集「夢の餘波」 (兼題歌)	四八
成島玉園(遺稿)の追悼歌「玉園遺光」	四八
徳川義直二百五十年祭追悼集「かたみの水くき」	四八
第三篇 明治前期の選集の女性歌	五五
第一章 概説	五七
第二章 選集	五八
新竹集	五八
埋木廼花	五八
明治現存三十六歌撰	五九
明治現存統三十六歌撰	五九

目次

明治歌集	五七
開化新題歌集	五三
明治開化和歌集	五三
女子穎才集	五八〇
大八洲歌集	五九八
老の友かき	六三
明治響洋歌集	六五
梅か香	六一
苔のしづく	六三
内外詠史歌集	六四
庭の摘草	六四
昭代集	六〇
歌集あけぼの	六七
玉琴	六三
新題歌集	六一
国民歌集	七四
新題詠歌詞林	七六
白玉集（鮎玉集よりの撰集）	七三
明治百人一首	七六
勅題歌集	七七
付録	
系統図	七四

近代前期女歌人一覽表	七四
作者略伝	七五
索引	七五
歌集名	七五

第一篇

明治前期の女性の歌集

第一章 概 説

歌は日本の國民の感情の自然のあらわれである。その中で短歌が絶えることなく今まで二千年続いているのは、短い五句、三十一文字形式のなかで、主語の置き方や句切によって調べの上から變化を与え、内容にふさわしい表現をとって時代に應じて来たからである。いまひとつ歌が詠まれる場が正しく保たれたことをあげねばならない。古代から歴代の天皇は自身作者であられ、その周辺の人達も作り、且つ互に撰びあつて質を高めつつ、一首では力の弱い形態ではあるが、集としてまとまつた或る量を積んで本道をすすめて来た。集のなかには極めてすぐれたものがあり、古代の万葉集、平安初期の古今集、鎌倉初期の新古今集などは、和歌の持つ本質に根ざして、和歌の持つ機能性のあらゆる面をつくして、それぞれの特質・特徴を發揮している。

やがて時代や制度が移り、歌を作る階層が次第に拡がってゆくと、流派が生じ同じ勅撰集のうちにも歌風の考え方が対立し、新しいうけとり方を加える玉葉・風雅集の存在となっている。やがて歌格や歌詞にこだわり、歌柄のうえにある固定感が生ずることによつて作歌力が衰えて、古典に対しての訓詁解釈がさかんとなつて来たのであった。ひいては江戸期はむしろ国学として古典への関心が高まつた時代である。

和歌と女性

この間に女性には和歌の上でどの様な立場で如何なる役目を果たしたのであろうか。他の芸術と違つて最初の出発から参加して、相聞は男女ともに呼応しあつて成立し、挽歌に真情をつくしていることに男性、女性の差は見られない。

さかのぼり特に時代的な動きとして持統天皇の負われた立場に注目したい。父天智・夫天武のあとをうけて、律令國家の完成につくされるとき、文化國家としての發展に主力をそがれたのである。大化改新は天智・天武によつてなされ、仕あげは持統天皇によつてなしとげられたといえる。つまり國家体制の確立期に当り實質的に完成させたのである。この大事業の実現されてゆくときに波乱の多かつた戦亂のあとに、世情の不安を治めるに、律に対して令を重んじ、文化面に衆目を転じさせたのである。

女帝としてさきに皇極があり、再び即位して斉明となるが、この場合実権は中大兄にあつたので、期間も極めて短かつた。

斉明天皇にもよい歌があり、このころ額田王の登場となる。額田王の歌は斉明天皇とも額田王とも、どちらとも決しがたいが、まさに動亂の中であつた。この世情不安のなかで額田王は優婉な歌風で